

北浦 実奈

KITAURA, Mina

想像を創造する生き物

The living thing that creates imagination



天使の大移動
An angel's great migration
インスタレーション
Installation
227.3 × 181.8 cm



季節の変わり目 / A seasonal change
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
227.3 × 181.8 cm

修了論文：想像を創造する生き物

The Living thing that creates imagination

荒木 美晴

ARAKI, Miharu

平面作品における色空間の広がりの可能性

Possibility of the expansion of the color space of planar artworks



ある夏の空の移ろい
The changes of the skies during the summer
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
210 × 323 × 323 cm



世界は色であふれ、互いに影響し合っている。私の制作はそういった色彩に反応して観察し感動することから始まる。特に自然が織りなす色彩には畏敬の念を感じずにはいられないのである。感じた色を薄く溶いた絵具で線を引き、それを何度も繰り返すことで線と線が重なり合い層になって生まれる色彩と、目の中で色が混ざる混色の原理に興味を持ち、平面作品における色空間の広がりを探っている。

私の制作において、色に関する興味は、全体の大半を占めるといってよいほど重要である。美術を志す以前に、印象主義の絵本や優佳良織、かさねの色目を見た経験が今の私の制作に通じている。色を、風景を、見るのが私の制作の第一歩だ。見る経験を重ねるために一人旅に出かけ、実直に色や世界に向き合いドロイングをする。このドロイングが私の制作の核であり、この時の臨場感が私の絵に説得力を与える。

上から下へ、色の線を引き。端から端へ引き終わったら、支持体を90度回転させて、また上から下へ、端から端へ、色の線を引き。その行為の連続によって、色を重ね、色を並べ、組み合わせる。色を見ることから線を描くことまで「自分でやっている」と自覚することが私には必要なのだと思う。

色を重ねてできた色空間は何なのか。また、何であることを望むのか。私は数年に渡りこのような絵を描いていながら、未だにこの色空間が何なのか、わかっていない。風景から色を選ぶが、風景の再現が目的ではない。視覚混合を用いているが、錯視を誘うことが目的でもない。反復しても最小に見えても、そのような考えの為に描いているのではない。ただ、色を重ねて色空間を描くことが、楽しくて美しく思える感覚を得たから、今でも続けている。そのような個人的な絵は美術とは言えないのかもしれない。しかし、無理な理由付けをすることに頭を悩ますより、自分の目や脳、記憶に取り込んだ色を自分の手や体で吐き出したい。自分で色を見て、色を選び、線を引き。そのような経験と行為の集積によって「自分で描いた」と自覚し、自分を確認する。すると、色を重ねてできた色空間は、私が私を確認した成果物と言えそうだ。見ることのできない経験と行為の集積が、色と線の集積というかたちで可視化され、画面を覆った結果、私の絵となる。今のところ、そういう理解である。

修了論文：私の作品—色と線—
My Works—color and line—

粟田 ちひろ

AWATA, Chihiro

記憶と絵画の平面世界

Memory and the planar world of pictures

記憶をテーマに平面作品の制作をしてきた。絵画の平面性と記憶というものの主観性に共通点を見出したのがきっかけだったと思うが、描けば描くほど絵画そのものの魅力について考えることの方が増えていった。平面であることの面白さ、絵である必要性、感覚と感覚の狭間に立つ瞬間とは。論文でも主にそのあたりについて書いた。



旅の夜 / Sweet dreams
Night of a trip / Sweet dreams
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
259 × 194 cm



旅の夜 / ゴースト
Night of a trip / Ghost
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
91 × 116.7 cm



旅の夜 / サイレン
Night of a trip / Siren
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
91 × 116.7 cm



旅の夜 / 自由落下
Night of a trip / Freefall
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
91 × 116.7 cm

修了論文：絵を描いている今日の私
The me of today painting a picture

大西 沙織

ONISHI, Saori

場所性における「私」の实在論

Theory of "I" in relation to place



水景
Seascape
紙 / パネル
Paper on board
各 176.5 × 83 cm (6 枚組)

修了論文：喪失の物語 — 場所性における「私」の实在論
A story of the loss – theory of "I" in relation to place

大西 るい

ONISHI, Rui

セル画で表すモノ

Representation in celluloid



8:17「顔バン...」
 8:17 "What a blow..."
 クリアフィルムに油彩、黒インク、アクリルガッシュ
 Oil, gouache and black ink on clear films
 350 × 800 cm

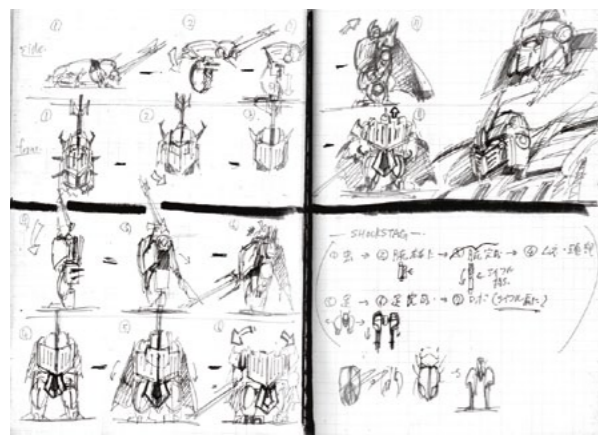


図1: スケッチブックに描き貯まったロボットを登場させた作品。セル画を用いたアニメに登場するロボットやメカ達には、金属の質感を徹底した3Dのそれらとはまた別の独特の質感や迫力がある。アニメーションでもイラストでもないセル画でそれらを表したかった。



図2: イメージスケッチ
 作品制作に向けてではなく、その時想像したものを描きとめる感覚でノートに貯める

修了論文：戦機機体解説 (God knows)
 Dummies exposition (God knows)

片山 有美子

KATAYAMA, Yumiko

相互関係における世界の構造

Mutual connections and structuring of the world



コンチエルト / Concerto
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
227.3 × 227.3 cm

私はある1つの存在は、決してそれ1つでは存在していないと考えています。そして沢山の「個」がそれぞれに目的をもちながら存在している中で、お互いが何らかの影響を与え合いながら編み目のように複雑に相互に関係し合い、成立しているのがこの世界だと考えているのです。

この私の考えと、作品との繋がりは、絵画は、沢山の「個」としての要素が関係し合った私の考える世界の俯瞰図のようなものです。そしてパフォーマンスで行っていることは、自身がその世界のある1つの「個」として1つの目的に向かい、今ここに存在するという事なのです。



上
Handのエスキース / Hand's Cartoon
キャンバス、油絵具 / Oil on canvas
162 × 162 cm

左
Hand
毛糸、布、綿、有美子
Wool, cloth, cotton and Yumiko
サイズ可変 / Variable size

修了論文：相互関係における世界の構造 — 連綿とした繋がりの中で —

Mutual connections and structuring of the world – Within the structure of interconnection –

川部 梅子

KAWABE, Umeko

体感温度

Sensory temperature



風が通りぬけて / Wind goes through it and
インスタレーション / Installation
サイズ可変 / Variable size



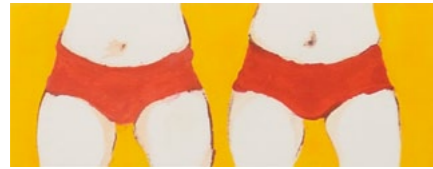
修了論文：体感温度 / Sensory temperature

後藤 莉栄

GOTO, Rie

モノタイプ技法を中心とした作品制作

Work production with a focus on monotype techniques



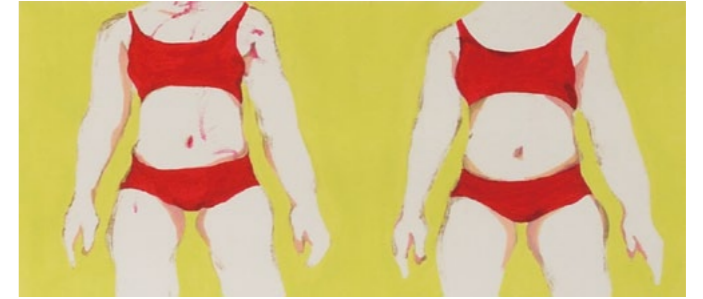
左上
1.
油絵具 / 紙
Oil on paper
10.8 × 27.7 cm

左下
3.
版画用油性インク / 紙
Oil-based printing ink on paper
19.8 × 24.7 cm

右上
2.
油絵具 / 紙
Oil on paper
15 × 26.8 cm

右下
4.
版画用油性インク / 紙
Oil-based printing ink on paper
16.5 × 24.7 cm

右
5.
油絵具 / 紙
Oil on paper
17.9 × 39 cm



下
6.
アクリル絵具、オイルバステル / 紙
Acrylic and oil pastel on paper
54.5 × 54.5 cm



修了論文：制作のためのノート

Notes for creation

齋藤 有紀子

SAITO, Yukiko

色彩の表現

Color expression

色彩それ自体を絵画の主題とすることは可能であるか。グリーンバーグの絵画論と、ゲーテの『色彩論』を手がかりとして、絵画における色彩とは何かを考え、絵画を構成する要素としての形式的な色彩から、内容としての色彩への移行を模索する。身近な事象として色彩を取り上げることによって、色彩そのものを主題として表現することを裏付け、絵画を表現するための手段ではなく、目的として色彩を捉えることが可能になるのではないだろうか。



風色

Kazairo (Colors of the wind)

油彩 / キャンバス

Oil on canvas

各 162 × 130.3 cm

修了論文：絵画における“色彩の表現”の試み —グリーンバーグとゲーテを手がかりとして—
Attempting “color expression” in painting —Based on Greenberg and Goethe—

佐藤 綾香

SATO, Ayaka

所作と表情の中の美

Beauty in facial expression and gesture



お年頃 / Young girl
油彩 / パネルに綿布 / Oil on cotton cloth on panel
162.1 × 162.1 cm

自分の記憶や経験、感動などは自己の内面に存在する。それらを想起したり、ただ単に無意識のうちに脳内を流れていたり、現実とそれらが合致してデジャヴのように唐突に蘇ったりと、内面におけるそれらの動きというのは活発である。その活発な記憶や経験、感動のカタチを絵具の造形性や相応しいヴィジュアルを用いて視覚に見える状態にすることは、内面にあつたときよりも洗練されて表出する。心で考えている時の自己と、半客観的な位置にある描き手(自己)は、対話をしながら作品は出来上がっていく。内面にある自分にとって、視覚化する作業を行う自分は、自分であり他者である。他者である自分を感動させたくて制作をするといっても過言ではない。自分の感動の為に描きたいものを描くという

衝動は、他者と私、もしくは人間というものとはどのようなことを共感し合い、生きているかという問いを意識的に、執拗に追うことと似ている。他者との関係を繋ぐもの、それは言葉や文字、絵、様々な感情の伝達方法がある。その中でも所作や表情に内在する美については、人間にとって普遍的な感情からなるものであり、他者と共感できる部分が多く、私達の生活に身近に存在しているものである。私は自分と他者(対象)との関係から生まれる情愛を注ぐ気持ちが美しい関係に繋がり、美しさとは他者を想うコミュニケーションとしての所作に及ぶものであると解釈している。その解釈から派生した考えを掘り下げながら記憶の中の人や作品を観る人など多くの他者を意識しながら外へむけて制作をする。



花になる
Become flower
油彩 / パネルに綿布
Oil on cotton cloth on panel
162 × 194 cm

修了論文：所作と表情の中の美

Beauty in facial expression and gesture

鈴木 紗也香

SUZUKI, Sayaka

自己と他者、内と外、相反する概念の絵画的視点

Myself and others, inside and outside – pictorial perspective of opposing concepts

修了論文目次

I 自己作品とその背景

1. ステイトメント
2. 美術予備校によるシステム化

II マティスと私

1. マティス—窓—
2. マティス—装飾性—
3. マティス—色彩について 象徴性—
4. マティス—色彩について 絵画性—

III 絵画的視点をもって、その先へ—サイトスペシフィック—

1. 絵画における展示形態について
2. インスタレーション作品

IV 結び

世界の秘密は暴けるか

修了論文概要

第一章では事自己作品のステイトメント、それに到る動機について言及した。

第二章では画家アンリ・マティスと自己作品や制作へのプロセスなどに見る類似性を比較しながら主に絵画性を基に論じている。

第三章では自身の絵画的視点を元に展示形態や環境など、絵画作品の外の問題に触れている。



4人のアトリエ
4 artists' atelier
油彩、アクリル / キャンバス
Oil and acrylic on canvas
224 × 160 cm



上
靴擦れ
Shoe sore
油彩、アクリル、布 / キャンバス
Oil, acrylic and cloth on canvas
349.4 × 454.5 cm
下
Family
油彩、アクリル、布 / キャンバス
Oil, acrylic and cloth on canvas
130 × 160 cm

修了論文：自己と他者、内と外、相反する概念の絵画的視点

Myself and others, inside and outside – pictorial perspective of opposing concepts

鈴木 佑海

SUZUKI, Yumi

社会の中に在る個人・個性

The personality that exists is in society



すすむ道
Path to choose
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
162 × 112 cm

ただそこに「在る」ということ。それだけでいい。

私たちが生きて、生活していく中でそこにいるということは決して一人でなしえることではなく、過去や現在があつてこそのものである。たとえば身近なところでは家族や成長していく中で出会った人、育ってきた土地や属する社会にも

大きく影響される。そして、その影響なくして私たちがそこに「在る」ということはできないのだ。

しかしその影響はよいことばかりではなく、私たちの生活を脅かすこともある。それでも、私たちは私たち自身の個性を持ってここに「在る」ということ。そんな思いを絵画に込めていく。



形成
Affected and formed
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
227.3 × 162 cm

修了論文：「在る」ということ / I'm here

高橋 千尋

TAKAHASHI, Chihiro

宇宙と庭園の間 —私だけの世界—

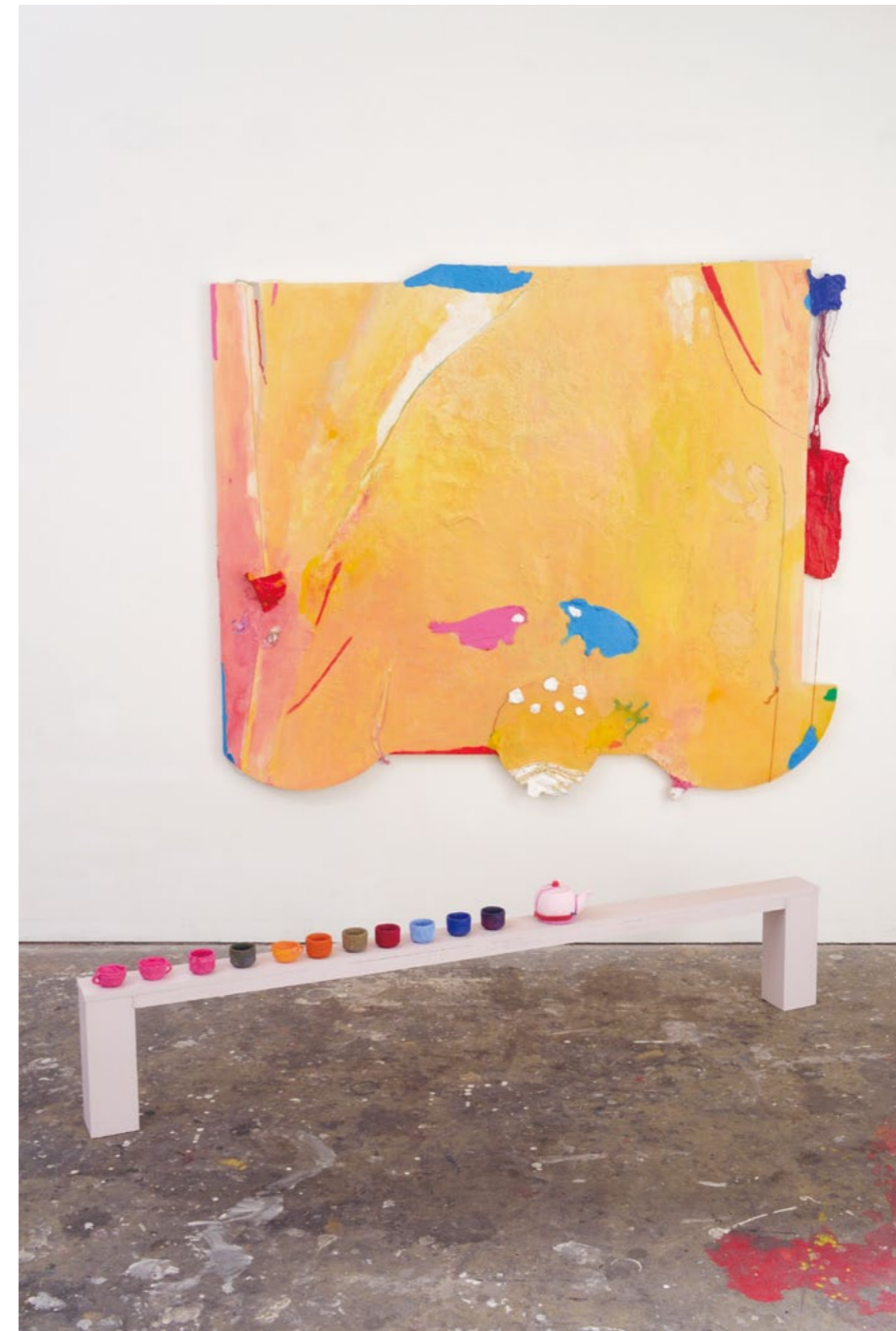
Between the universe and the garden –My world–

表現するなら優しい気持ちになれるものがいい。生きていたら嫌なことはあるし、自分の身の周りのことでもテレビや新聞、ネットで恐ろしいニュースを目にする。どんなに理想的な人生を歩んでいる人でも世間知らずの人でも傷ついたことのない人はいないし、恐いと感じたことのない人などないだろう。そういうことは自ら味わわなくても向こうから勝手にやってくるものだ。反対に楽しむことや癒しは忙しい日々の中で削られがちだ。楽しむことや癒しは甘え、遊びという言葉に置き換えられ後回しにされる。疲れて笑わなくなってしまっは自分のことで精いっぱい他者を思いやることなど出来ない。人は群れで生活する生き物だからそれで

は生きにくくなってしまふ。優しい存在が必要だ。芸術は物事を忘れて今の時を純粹に楽しむ空間を作る優しい存在であって欲しい。私は私の作品を観た人が一瞬でも考えることを忘れて頭の中を空っぽにしてもらえたら嬉しい。私の作品を観て何これといった笑いでも楽しんでくれたらいいし、多少であれば作品に触ってもらってもいい。少しでも頭の中を楽にして欲しい。これは学部の時から変わらない感情であり、私自身から自然に出てきたものである。観る人が作品をどのように観て考えるかは自由であるが、私が人にあげたいものはこれである。



お空に向かって / Departure
ミクストメディア / Mixed media
260 × 260 × 50 cm



お茶をどうぞ温かいうちに
Tea ceremony house of the moon
Please sit down
ミクストメディア
Mixed media
200 × 200 × 14 cm

宇宙の住人は月に住んでいる。
地球の水は月の引力によって満ちたり引いたりする。
大潮の時、宇宙の住人はその水に乗せて
数人の地球で疲れている人を月に招待する。
そしてお茶を振る舞う。

決して料理は出さない。
地球の住人がそこに居ることを許されるのは
潮が引くまでの数時間だけ。
それ以上の長いは出来ない。
あまり長く離れたら戻りにくくなるから。

修了論文：制作研究の経過報告 —作品展開図—

Progress report of artwork research –work development plan–

田邊 結佳

TANABE, Yuka

自己を形作るかけらについて

The parts of self

修了論文：透明な身体が映し出すもの

The strengths and weaknesses of the transparent body



グラウンド
Ground
ミクストメディア
Mixed media
60 × 270 × 270 cm

田沼 愛子

TANUMA, Aiko

見ること見ないこと

It can be seen and it cannot be seen



めまい
Giddiness
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
91 × 182 cm

風邪をひいたり病気になったりするとこの熱や痛みや苦しみのエネルギーはどこから来るのか不思議に思う。感情や感覚は目には見えないがたしかに存在する。モチーフを介してこれからも描き続けて行きたい。



湿度
Humidity
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
50 × 60 cm

修了論文：見ること見ないこと

It can be seen and it cannot be seen

樽井 英樹

TARUI, Hideki

描きながら考えること

Considering while painting

筆触と物語性を用いて、描きながら完成を考える絵画を描いている。最終的に目指されている画面は、状況の設定を持ちつつも描画の方法が抽象的で多様な見方が可能であり、いつまでも加筆が可能であるような、永遠に現代的な絵画である。

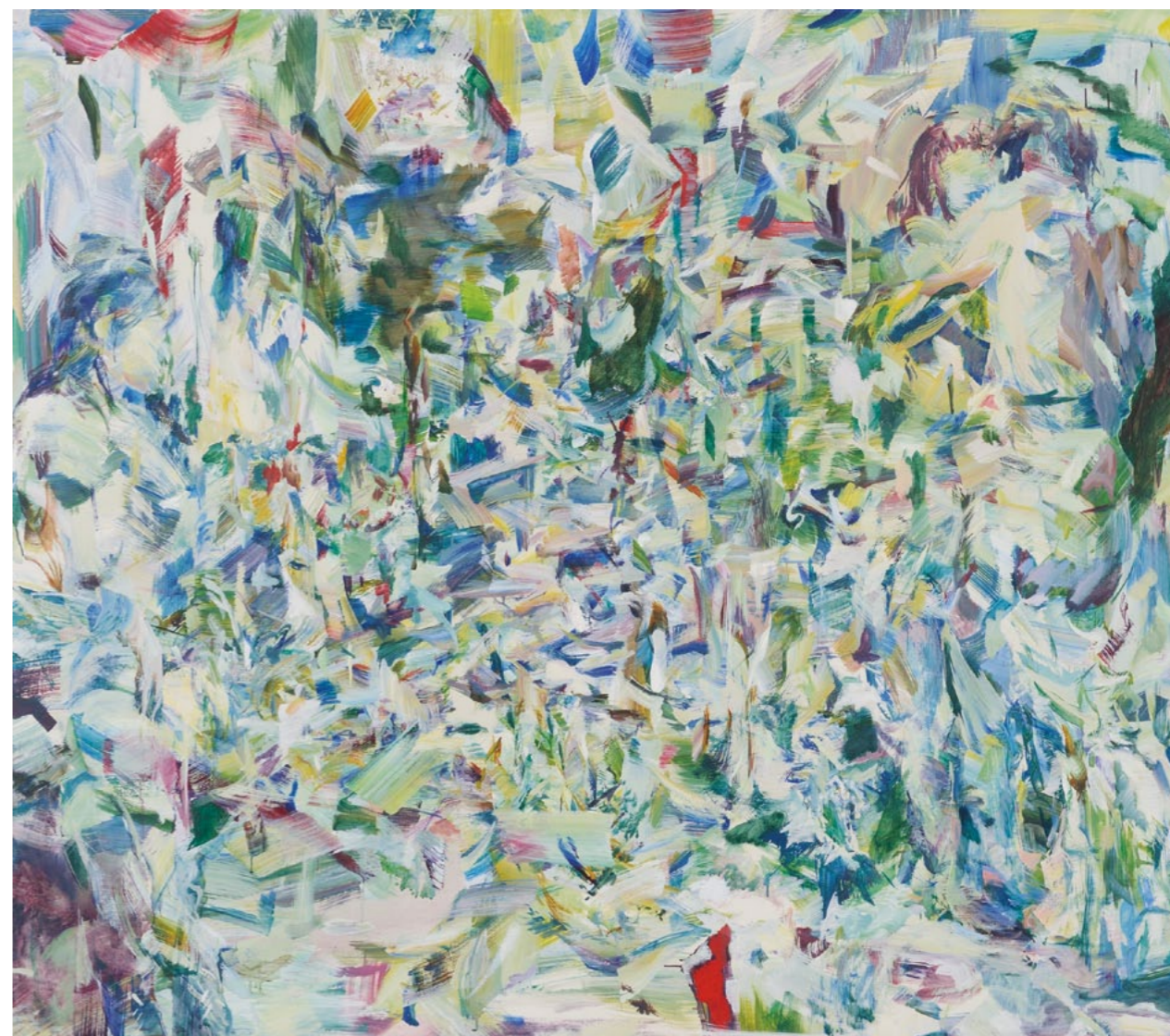
筆触それ自体は抽象的なものであり筆触がその形を保ったままの画面においては、イメージを捉えたかと思うと再び筆触への分解が起こる。画面は見る者の欲求を吸い取って、何かに見立てられ納得されることを拒み続けるのである。絵画が描かれているとき、筆触は経験による判断や直感によって置かれる。経験による判断の場合、具体的なイメージの形に添うように筆触が置かれたり、画面の中の空間において手前にあるのか奥にあるのか置きたい位置関係を考えたりすることによってどのように描くか判断される。また色彩や画面上の面積、疎密の関係の判断も経験によって培われるものだ。そのような理論的判断から逸脱した判断が直感的に起こることもある。空間的イリュージョンを描くには描き出そうとする意思によって描かれなければならない。しかし今まで描いてきた状況を一変させるようなこと筆触や、その周りの筆触と明らかに異なった、狙いとも言えないような気分の変化によって置かれた筆触も画面には存在する。その加筆に具体的な狙いがあるのかないのか、その判断は経験に基づいているのかないのか、断定することはできないが、先入観にとらわれていないと言える。そのような理論的判断と気まぐれの組み合わせが絵画の完成への道のりを複雑なものにする。

また物語性は期待と想像を画面に閉じ込め続ける。終わりのない物語の、ある部分が硬直していることで、想像の余白を生み出し続ける。描かれるものが見る側に物語を発動させるためのただのスイッチであるのなら、描かれるものは何でも構わない。むしろなんでもないものをいきなり発見し、新たな意味を与えることが可能なのではないか。物語を既存の素材から引用する際、その具体的な素材に引きずられすぎではない。素材と同じ物語を語るのではなく自分の言葉で語り直さなくてはならない。描く際の判断を、写真を写

すなど、素材の通りにしてはならないのだ。素材から得られるものはあくまできっかけにすぎない。そのきっかけから、描く対象や状況を頭の中にどれほどリアルにイメージできるのか。想像上のリアルさは実物を目の前にしたリアルさのように安心して確認できるものではないが、その分可塑的である。引用から始まった物語が画面上で新たな物語へと展開していく。具体的にイメージすることと、画面の状況による判断に従うこと、そのどちらも絵画を描く際必要な描画であるならば、そのどちらを選択するか、一筆ずつ判断する必要がある。その判断の分岐も描いていく道のりを複雑にするのである。

それら筆触と物語性を用いる「描きながら考える絵画」とは、つまり多くの画家に共通する、絵を描きながらどういう風に描こうかと考える思考の強調である。あらかじめ定めた完成に向かっていくのではなく、完成を模索していくことが描くということなのだ。意図した方向へ画面を修正していくというより、偶然と発見によって、思わぬ方向へ画面が展開していくということである。画面に置かれた抽象的な筆触の集合がモチーフに見えたり、再び筆触に分解されたりを繰り返す。それによってモチーフの質感を絵の具によって具体的に表現するのではなく、そのイメージの輪郭を絵の具に置き換えることで、絵の具であるということを基点にしてイメージと物質を行き来することができる。モチーフの意味を解釈するのではなく、見え方が多様であることと画面が変化していく可能性は、鑑賞者の想像の余白となる。

想像の余白があるということは、絵を読み解くための解決されていない時間を生み出しているということだ。未体験を未来、解決済みを過去とするならば、わからないことが残っている限り絵画は現在にある。体験は新鮮さを失わず、完了されていないのであるから、絵画は常に現代的な存在なのである。



街路樹

Roadside tree

油彩 / キャンバス

Oil on canvas

160 × 183 cm

修了論文：永遠に現代的な絵画の芸術的体験

The experience of eternity in contemporary painting

豊田 佳菜子

TOYODA, Kanako

自己対峙の記録

Record of self-confrontation

美術とは何かということを正しく考えることよりも、私にとっての美術というものに正直でありたいと思っています。今はまだ個人的なつづやきの域を出ない作品かもしれません。しかし、それを糸口にして、いつか大きくて普遍的なところまでたどり着きたいと考えています。「言葉がなくとも作品が雄弁」そんな作品が私の目標です。

修了論文：自分や絵や人間について真面目に考えたこと

Discussion on painting and myself



天秤
Ambivalence
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
162 × 97 cm

中田 拓法

NAKATA, Takunori

絵画におけるリアリズムの定義について

On a definition of realism in painting



心臓 / Heart
アクリル、油彩 / 木製パネル / Acrylic and oil on board
162 × 162 cm



左
卵池 / Egg Pond
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
45.5 × 53 cm



右上
決まりごと / Convention
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
53 × 45.5 cm



右下
夏の夜 / Summer Night
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
116.7 × 116.7 cm

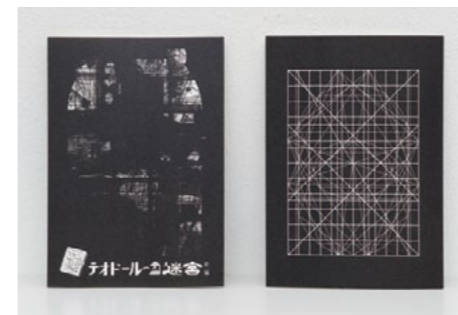
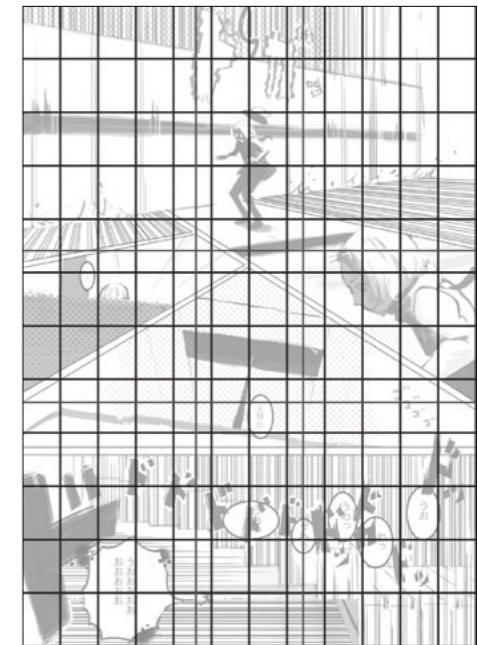
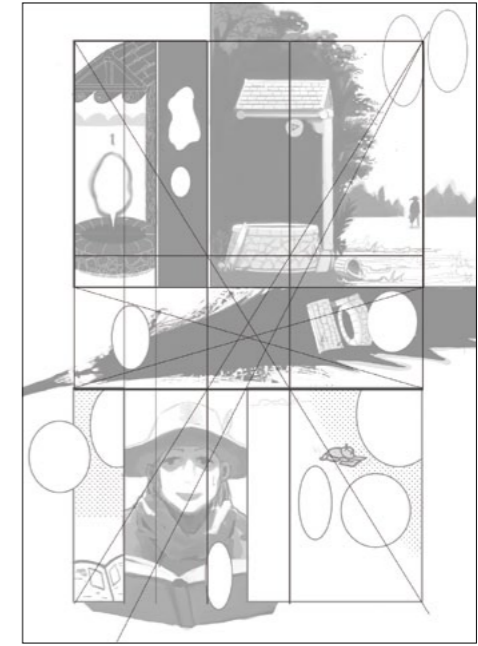
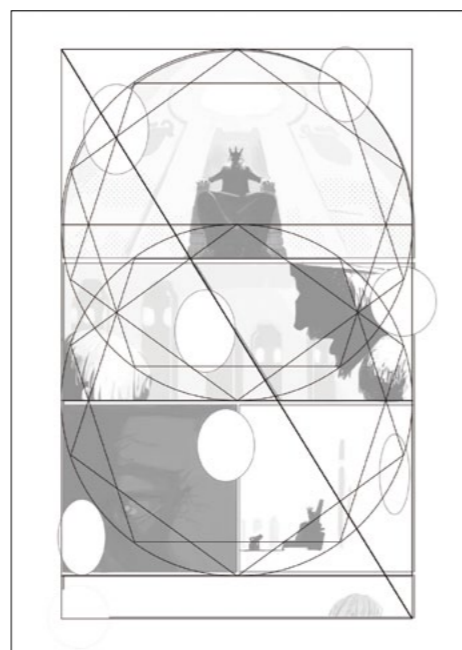
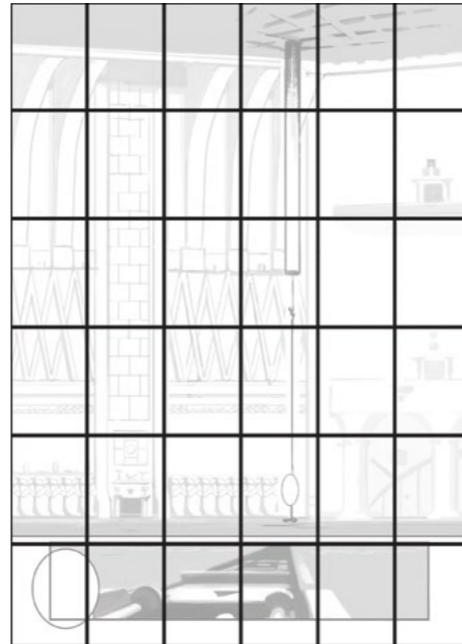
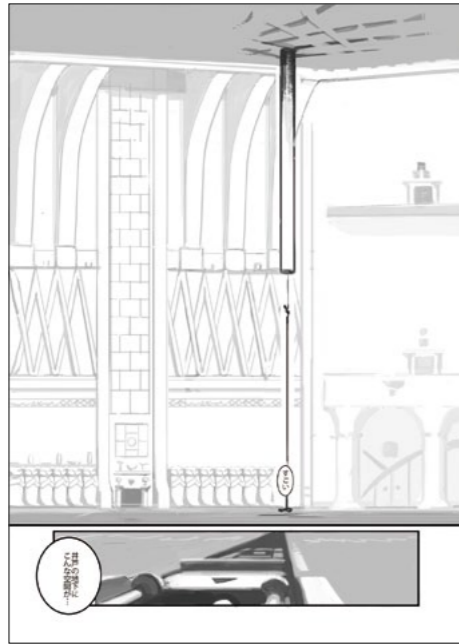
修了論文：絵画におけるリアリズムの定義について
On a definition of realism in painting

新田 朗大

NITTA, Akihiro

「漫画」の技法実験

Technique experiment in "MANGA"



テオドールの迷宮 (前編)
Theodore's dungeon
本 / デジタル出力
Book
21 × 148 cm (12 ページ)

修了論文：比例分割法を用いた漫画制作の記録

A record of panel layout using a proportional division technique

本田 和葉

HONDA, Kazuha

私と他者、そのあいだ

Myself in the world

この世界に生活しているのは私だけではない。そこにはいつも他者の存在がある。私たちはだれしもが他者になにかをつたえるため、日常的に表現行為をおこなっている。作品制作とはそうした表現行為のうちの一つであるが、日常的なそれではつたえることのできないものごとを、つたえることのできる手段であるとする。

本論では、私が作品を制作する契機となるものごとや、作品展示の場について、具体的な例を挙げながら「私はなぜ作品を制作するのか」についてあきらかにしてゆくことを試みた。

第一章「私の前に存在する『あいだ』」では、私と他者との関わりのなかで自分自身はその都度変化していくことに着目した。私という曖昧な存在が、「私ではないものごと」と出会うことにより、あらたな輪郭を獲得し、以前とは異なる「私」となる。そのときに生まれる葛藤や感情がみずからの作品制作の契機になっているとした。

第二章「私の後に存在する『あいだ』」においては、能動的にみずからの変化をよぶシステムを、共同制作という場、またその展示の場で実践した経験から、個であると同時に全であることの重要性に言及した。「私」を獲得したあと、それを再び私と他者の「あいだ」に配置する作業や展示は、ひとつの結果であり、あらたな作品制作の契機となる。

私は、他者とのコミュニケーションのなかから、制作の契機を得る。そのようにして制作された作品は、展示されることによって、再び他者と私との「あいだ」に戻ってゆく。その繰り返しにより、私は私を存続させてゆくことができると考える。他者と関係してゆくことを思考しながら、また実践しながら、作品を制作してゆくことは私にとって「私とはなにか」という難解な問題を解決してゆくことに肉迫するひとつの方法にほかならない。私は、概念的なものにかたちを与えることを諦めずにいたいのである。

私と他者の「あいだ」から、他者を知り、みずからを知り、そのなかで自分自身の変化をたのしむことが、作品制作においてもみずからの生活においても、必要不可欠な営為であるとする。他者により私が変わり、私により他者が変わり、それにより世界が変転してゆく。そしてそれらはすべてふたたび私に還元されてゆくのである。このように思考してはじめて、私は私のために作品を制作しているということができるのである。

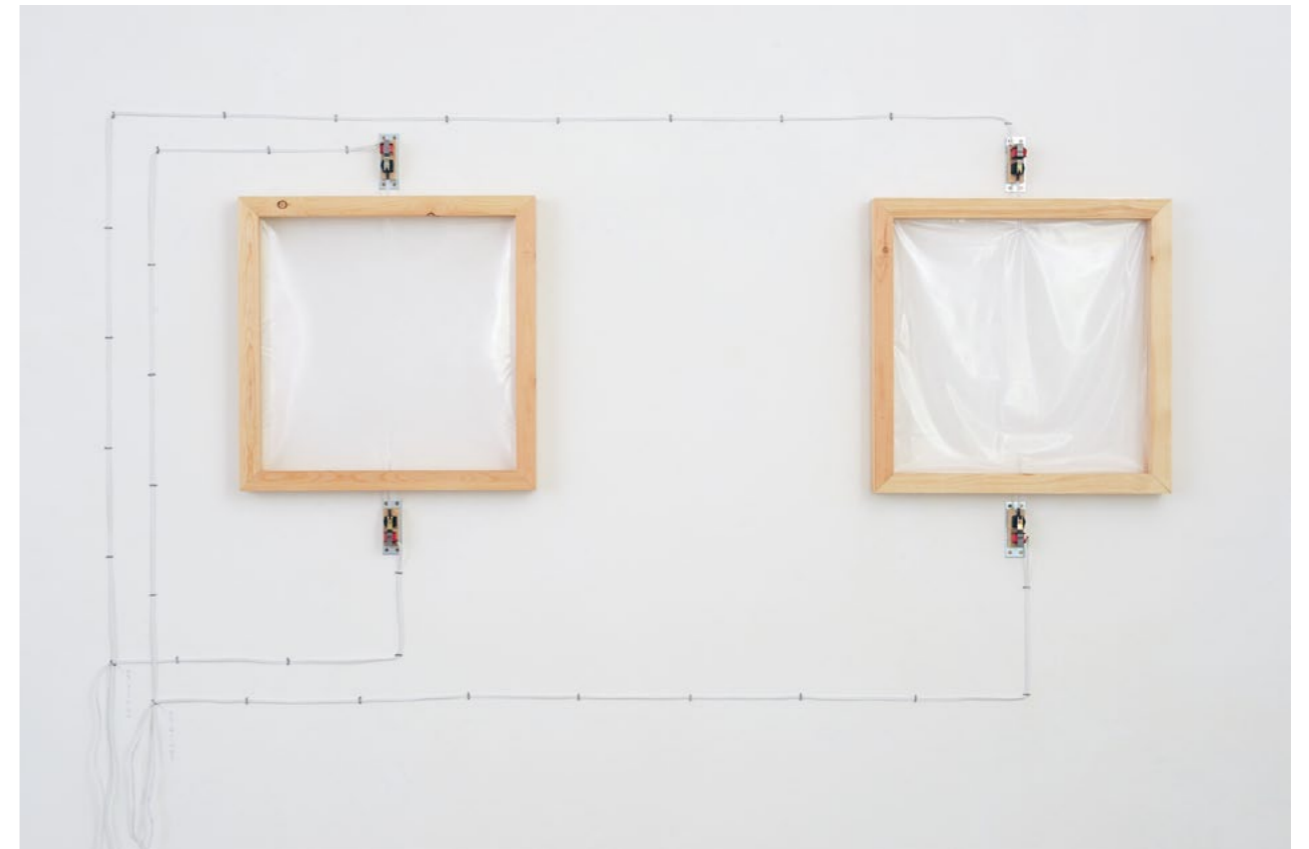
修了制作(右図)においては、作品と鑑賞者との関係性を可視化することを試みた。これは、その相互性や曖昧さから、断絶されつつも繋がっていることが体感できるような、かんたんな装置である。

修了論文：私と他者、そのあいだ

— 作品制作における「私」の存続 —

Myself in the world :

Art creation as continual conversations



その空気のこの空気のその空気 / Air is air is air

ミクストメディア / Mixed media

サイズ可変 (Variable size)

水野 里奈

MIZUNO, Rina

繋がりをもって絵画を構築していくこと —この味はアノ風景—

Structuring paintings with connections –this landscape has that flavor–



シュヴァル・浮世
Cheval・layer
油彩、ボールペン/キャンバス
Oil and ballpoint pen on canvas
130 × 194 cm

中東の細密画のような装飾、キャンバス地そのもの、伊藤若冲における水墨画の筆致、浮世絵のような絵画には珍しい構図などを考慮しそれぞれを互いに生かすことを心がけている。

絵画空間をレイヤーの層に置き換え、絵画空間を構成。一般的なキャンバスは白の顔料が塗られており、事前に人の手が加わってしまっている違和感があることから、麻のキャンバスそのものを使用している。

緻密な装飾性と、白の顔料すら塗られていないキャンバス

地は、相反する出来事で、一枚の画面に混在する事で互いを生かすことができる。多視点を一枚で表現できる絵画ならではの目の錯覚も興味ある事の一つ。

作者が、作品一枚一枚の事を誰よりもよく知っている、その本人が驚くような作品があれば観覧者からはもっと大きな、驚き以上の何かが生まれるのではと期待しています。

絵画を見たとき作者自身さえも、思わず驚いてしまうような作品。そんな絵画を描くことを目指しているし、見てみたい。



庭にはびこる
Garden in spreads
油彩、ボールペン/キャンバス
Oil and ballpoint pen on canvas
182 × 227 cm

修了論文：繋がりをもって絵画を構築していくこと —この味はアノ風景—

Structuring paintings with connections –this landscape has that flavor–

三ツ木 陽介

MITSUGI, Yousuke

形式と内容

作品上での相乗的な共生関係

Form and matter

The synergistic relationship in artworks

日本にはかねてからこの富士信仰に基づいた、富士山を描いた絵画が数多くある。例えば葛飾北斎(1760-1849)の「富嶽三十六景」や、歌川広重(1797-1858)の「東海道五拾三次」などが有名であるが、富士山が描かれた現存する最も古い作例は11世紀中頃の、秦致貞の「綾本著色聖徳太子絵伝」まで遡る。(中略)歌川広重「名所江戸百景」からは江戸時代における富士が江戸町民たちにとってきわめて身近な存在であることがうかがい知れる。では現在の我々と富士との関係はどうであろうか。今現在の東京を歩いても、高層ビルが立ち並んでいるため、私たちの視界の中に自然と富士の峰が入り込むことはとても珍しい。富士山は、2013年6月に「富士山 - 信仰の対象と芸術の源泉」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。しかし現代においての富士山はわれわれにとって、「信仰の対象」であり、「芸術の源泉」であるのだろうか。私の感覚からは到底そうは思えない。ここでの「信仰の対象と芸術の源泉」は江戸時代に栄華を誇った、過去の遺産であり、現代における富士を望むそれとは隔絶されている。日本は明治時代における文明開化を推し進めるために、西洋文明を積極的に取り入れた。その結果として、現代の私たちには明治以前、西洋文明を知る前の、日本人的体感覚を理解することはできない。

西洋文明が流入し日本人の感覚が変化してきたことを踏まえ、現代の感覚から富士絵画の制作を行った。ここでは、山を中心性による象徴的な扱いで描いているが、これは西洋文明的な象徴性を強調したかったためである。西洋美術の古典的な宗教画からは、中心性や幾何学的な対称性が読み取れる。こうしたことが明治時代からの日本人に多大なる影響を与えたことは言うまでもない。それを引き継いできた現代においての富士の描かれ方は文明開化以前のそれとは確実に異なってくる。富士を描く上でこのような事柄を画面上であらわしたかったのである。(修了論文より抜粋、一部変更)

通常、完成した支持体の上に筆致が重ねられ、絵画は生まれる。だがその状態で存在する絵画は、支持体の完成(形式の完成)と画面の完成(内容の完成)のプロセスが分離してしまっている。しかし形式に対し無思想ではいられず、分離した形式と内容を合一させなければならないと考えた。形式をかたちづくることによって内容がつけられ、内容をかたちづくることにより、形式がつくれなければならない。その形式と内容の相乗的な共生関係により、形式と内容の合一が図られ、自身の表現がよどみなく画面に浮かび上がるのである。(修了論文より抜粋)

「富士」が現代においてどのような役割を担っているのか、また、担っていないのか、に思いを巡らせてゆき、過去には存在したであろう「畏敬の念」のようなものが現代においては失われているということに着目する。「あったものがなくなる」というその現象をあらわすために「富士」をまずは立体的に制作し、「ある」という状況をつくりだす。この立体的な「富士」はまた、西洋文明流入以前の日本における「富士」のあり方をあらわしている。その後、西洋文明流入以後の「富士」のあり方をあらわすため、立体的な「富士」を木枠に張り、平面に戻す。このことは「富士」に対して「畏敬の念」のようなものが失われている現代の感覚に関連する。現代の「富士」は、レジャーとして気軽に赴けるものになった。われわれにとって現代の「富士」は日常との地続きにあるものであり、言ってしまうとそこに高低差はなく、きわめて平面的に感じられるものとなったのである。(修了論文より抜粋)



グラウンド / アラウンド
Ground / around
アクリル、ラッカー / 綿布
Acrylic and lacquer on cotton
280 × 560 cm

修了論文：地平—山—地平

Horizon—Mountain—Horizon

三宅 駿雄

MIYAKE, Toshio

絵画の平面性と、空間に及ぼす影響

The nature of the plane in paintings, and the influence that it has on space

絵画におけるスケールについては、マーク・ロスコが既に60年代初頭、大きな絵の制作について言及している。「私の描く絵はとても大きい。歴史的に見ても大きな絵を描くことで、壮大で豪華な感じが出せるのは分かっている。しかし私が大きな絵を描く理由は（略）単に親しみを持った思いやりを示したいからに過ぎない。小さい絵を描くということは、自分を経験の外に置いて、幻灯機の映像として経験を見ているに他ならない。大きい絵を描けば、その絵の中に入ることができる。自分の意のままにできるものではない」また「関係者と作品との間に構築される積極的關係に根差した」としている。その意味していることは、我々（人間）を内包するほどの大きさの作品は、絵の外の世界にその実態を与えるというようなことである。

スケールは、現代でも取り扱われるべきアートの要素である。古くからイタリアにおける教会の壁画でその重要性を内包していた。ロスコはイタリア教会壁画から着想を得て、ロスコームなるインスタレーションを考案している。またそれ以前にもニューヨーク近代美術館蔵のマティス、カンディンスキー、他メキシコ壁画に影響を受けているが、中でもモネ晩年の作品に影響を受けていることを注目したい。

また風景のスケールを表した、自律的な作品としてのタブローではない、睡蓮のパノラマがある。概ねロスコなどカラーフィールド・ペインティングの作家たちが目指していたのは、アメリカにおける宗教壁画であるが、モネの睡蓮からの着想から考えれば、ジャポニズム的な平面性をもった造形も理論的には応用が可能であるという認識もできる。

また、スケールを題材にコンセプチャルな美術の展開は高松次郎の影シリーズで感じることができる。高松次郎については、筆者が現在の作風にいたった一つの要因としてある。影、歪んだ遠近法のシリーズ、形シリーズ、その他のどれをとっても非常に単純かつ明快なコンセプトを提示していることから、非常にすぐれた作家であるように思う。

高松氏自身著作の『不在への問い』の中で、「今日の芸術はすべて不評である。それは偶然の計らずもそうなったのではなく、本質的にいわば宿命的にそうなったのである」と述べ、「芸術は限りない広がりとお行きを持った世界である」と定義している。これはネオダダの運動に参加していた高松次郎らしいことばである。続けて高松は芸術と自然の關係性についてこう述べている。「多くの人たちが絵画や彫刻の本質を誤解し、それを具体的なコミュニケーションの手段として考えている。もしそれが沈黙している自然のその沈黙から何か読みとれるというのと同じであれば、それは正しいと言えるかも知れない。しかし自然は人間とのコミュニケーションなど意図していない。自然は人間を包み込みながらもそれ自身のメカニズムで存在する。芸術もまたそれ自身のメカニズムで存在するという点では自然と似ている」

この語は高松次郎自身がもの派の作家たちと交流を深める中で、書かれたものようだ。芸術と自然について考えることは非常に人間的である。自然はけて人間とは交わるものではないがアートは人間の介入がなければ成立しないものであり、自然に介入しようとする人間の行為も芸術であるからだ。

それにしても人間が感じる空間は自然にしか存在しないものである。それは人間の営みをとってみても切り離せないことで、芸術が行われるべき現場も常に自然と共に行われなければならない出来事であるが、そこで行われる人間の作為自体が自然に反する行為になるために、芸術も自然も人間とは違ったメカニズムの中で存在するのである。しかしこういうふうにも考えることはできないだろうか、それは“人間の行った行為も本当は自然の一部ではないか”ということである。



上
緑のパロック
Green baroque
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
181.8 × 227.3 cm

左
発生 IV
occur IV
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
130.3 × 162 cm

修了論文：絵画の平面性と、空間に及ぼす影響（風景）についての考察

Consideration of the nature of the plane in paintings, and the influence that it has on space (landscape)

本村 桜アリス

MOTOMURA, Sakura Alice

すべてが飛び散っていく破片のリアリティーを再生して描く絵画

Painting together a fragmented reality, at the same time that everything falls apart



心の変化 / Changes of the heart

油彩、アルミ / キャンバス / Oil and aluminium on canvas

145 × 145 cm



破片、浮かんでいる / In Pieces, Rising Up

油彩、樹脂、アルミ、スワロフスキークリスタル / キャンバス

Oil, resin, aluminium and Swarovski crystals on canvas

162 × 130 cm

修了論文：ピリピリとした痺れを感じる

A feeling of pins and needles – a postmodernist post-traumatic stress disorder

森 綾乃

MORI, Ayano

のびやかにだらしなく

欠如と発見を価値に転化する

It is comfortably untidy

Converting lack and discovery into value



吐く息の白さに紛れ込む衝動
The impulse lost in the whiteness of the exhaled breath
透明水彩、アクリル、パステル、紙粘土 / パネル
Watercolor, acrylic, pastel and paper clay on panel
227.3 × 363.6 cm

芸術はもっと人間の根源的な部分や言葉では表現しきれない無意識の感覚、感動の抽象性なども表現できる媒体であり、五感を揺さぶって目には見えないものに価値を与える役割があることを忘れてはならない。

私はそのような価値の存在から目を逸らさずに真っ直ぐな気持ちで制作し続けたい。純粹な、ありのままの自分が自分であるための存在としての絵画制作を。そして生まれ持った身体性を武器にのびやかにだらしなく、手を動かす行為に

喜びを感じて“生”を実感する。自身の体験、日常生活での発見などが内面で咀嚼したものが混ざり合い、不可解な線と色彩、空間を用いて絵画として痕跡を残す。

個人の精神性の共有は非常に難しい行為であるが、そういう表現を行うことでどのようなパワーが備わり影響をもたらすのか、また社会に対して何を提示できるのかをはっきりと主張できるように私は今、作品を生み出し続けなければならないのだ。



修了論文：発火点と消失点

The ignition point and vanishing point

山内 透

YAMAUCHI, Toru

受験絵画とモダニズム

Examination paintings and modernism



見渡し坊主 / The boy who looks around the circumference
アクリル / キャンバス / Acrylic on canvas
162 × 130.3 cm



仰向け坊主 / Boy facing upward
アクリル / キャンバス / Acrylic on canvas
227.3 × 181.8 cm

修了論文：受験絵画とモダニズム

Examination paintings and modernism

山中七海

YAMANAKA, Nanami

絵画または日常の中における秩序の発見

Awakening order in painting and daily life



庭の中でのみ許される反抗
Rebel in the garden I
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
146 × 114 cm



庭の中でのみ許される反抗
Rebel in the garden III
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
116 × 89 cm



庭の中でのみ許される反抗
Rebel in the garden II
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
227.3 × 181.8 cm

修了論文：無秩序の中における秩序の発見

Awakening order in chaos

小林 由佳

KOBAYASHI, Yuka

私のフォルムそして空間の重なり

My form and degeneration of space



くりおね / Clione
油彩、ミクストメディア / キャンバス
Oil and mixedmedia on canvas
162 × 130 cm



上
トロトロトロ
Torotorototo (runny, gloopy, etc.)
油彩、ミクストメディア / キャンバス
Oil and mixedmedia on canvas
130 × 162 cm



左
クラゲさん I
Mr. Jellyfish I
油彩、ミクストメディア / キャンバス
Oil and mixedmedia on canvas
130 × 162 cm

修了論文：私のフォルムそして空間の重なり
My form and degeneration of space

玉木 雅子

TAMAKI, Masako

内面の表現

Expression of the inside

自身の制作で大切にしている事は、モチーフに観る自身の内面性です。自身の表現では常に私の視点で見た現実を表現しています。表層に囚われず、常に内面と向き合い、そのときに感じるモチーフを描き続けています。自身が内面で見えているものを見えているままに素直に描くということに尽きます。技術では補えない作者自身の経験を踏まえた内面性に表現の根源があると私は思います。内面の変化に伴い、同じテーマやモチーフを描くとしても時が経って描けば表現

が変化していくこともあるものだと思います。言葉が曖昧なように絵も同じだと思っています。変わる事もあり、言い切る事の出来ない事も時にはあります。経験以外の事は技術で補うが、重要なのは技術ではないと思っています。作者自身なりの表現こそ、技術では補えない精神のなり様が私には重要なのだと思います。自身が考える表現とは何か、絵画の定義とは何か、常に問い続けながら模索しながら自身と向き合い、これからも制作し続けていきます。



新鮮児 / Fresh child
アクリル、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Acrylic, gesso and instant coffee on canvas
65.2 × 45.5 cm



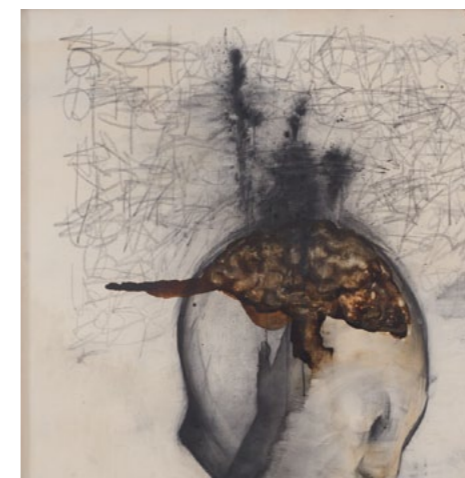
わんぱくスージー / Musical jolly chimp
アクリル、ジェッソ、インスタント緑茶 / キャンバス
Acrylic, gesso and instant green tea on canvas
145.5 × 89.4 cm



連続的変動 / Spiral
鉛筆、木炭、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Pencil, charcoal, gesso and instant coffee on canvas
117.7 × 92 cm



ツイン / Twin
木炭 / イラストボード
Charcoal on illustration board
55 × 40 cm

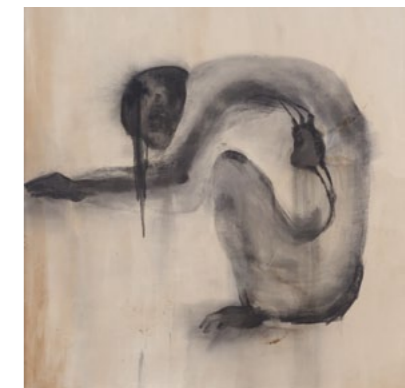


差別用語に苦しむ / Suffer discriminatory language
鉛筆、木炭、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Pencil, charcoal, gesso and instant coffee on canvas
133.5 × 133.5 cm

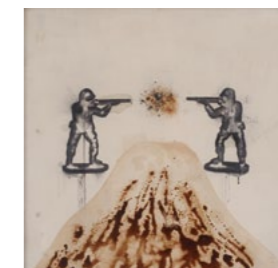
修了論文：内面の表現 / Expression of an inside



一人きりになって思索にふける時間を持つ
Spend time alone with one's thoughts
アクリル、木炭、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Acrylic, charcoal, gesso and instant coffee on canvas
118.5 × 82 cm



反省 / Soul-searching
木炭、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Charcoal, gesso and instant coffee on canvas
117.7 × 117.7 cm



人に向けては、いけません / Don't turn a gun on people
木炭、ジェッソ、インスタントコーヒー / キャンバス
Charcoal, gesso and instant coffee on canvas
67.5 × 67.5 cm

新田 祥子

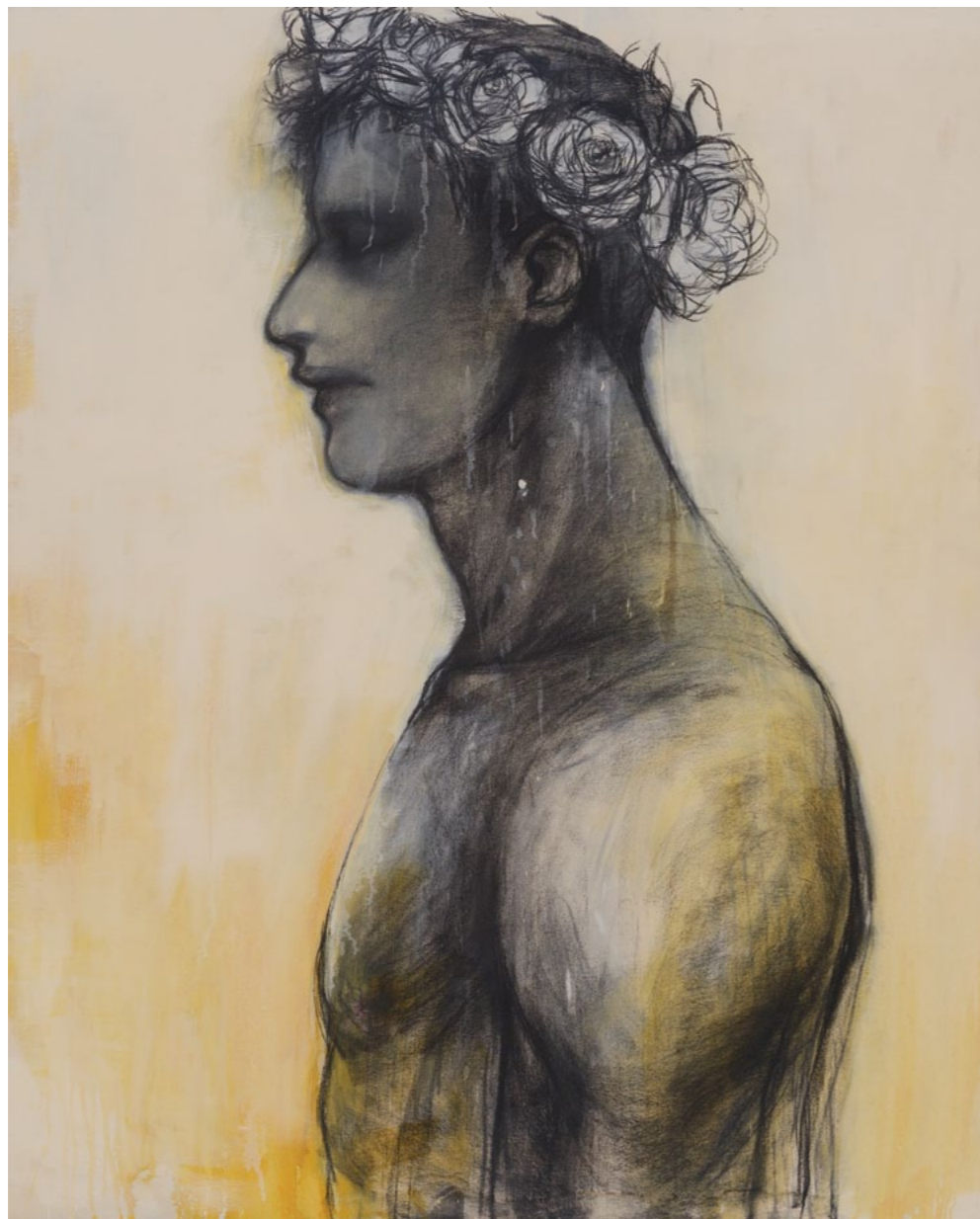
NITTA, Akiko

絵画による死の表現

Representation of death in painting or drawing

修了論文：カラヴァッジオの死の絵画に見る死の表現

Expression of death in the art of Caravaggio



花冠 / Corolla
木炭、油彩 / キャンバス
Charcoal and oil on canvas
162 × 130 cm



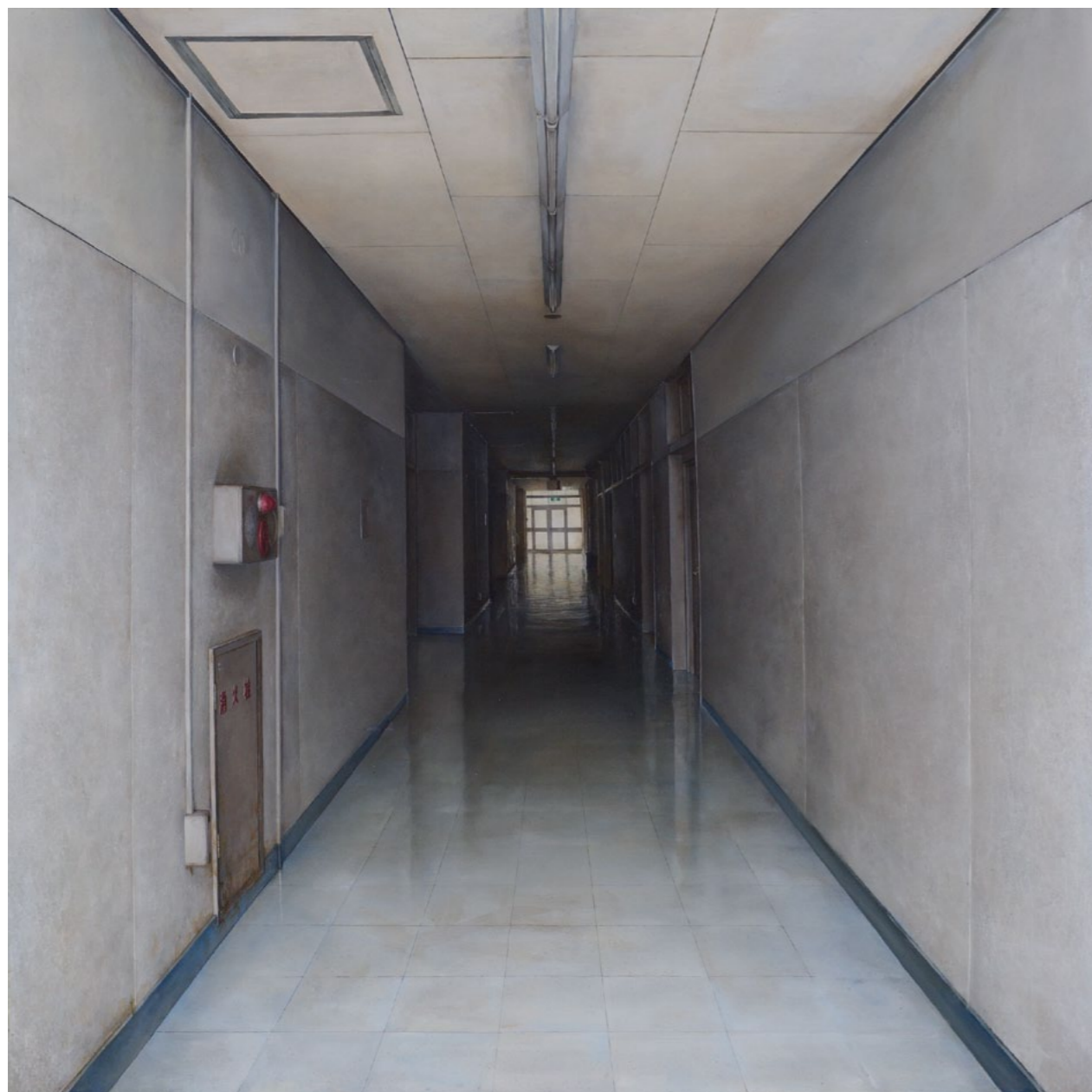
ナルキッソス / Narcissus
木炭、油彩、墨 / キャンバス
Charcoal, oil and Chinese ink on canvas
162 × 130 cm

林 晃司

HAYASHI, Koji

死の表現の可能性

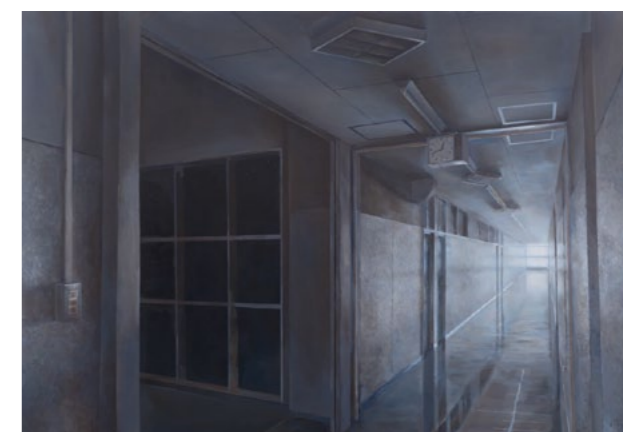
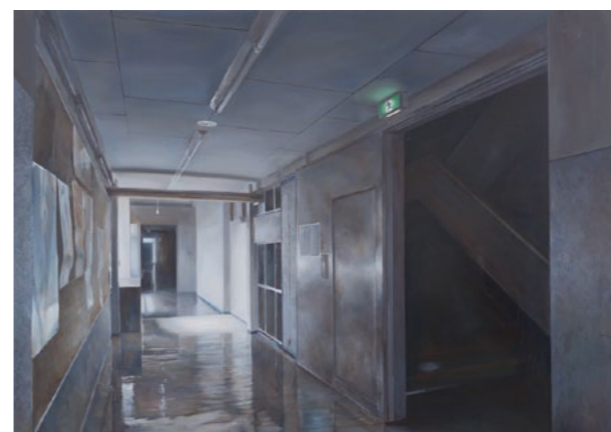
Possibilities of the representation of death



廊下 - 1 / Corridor - 1
油彩 / パネルにジェッソ / Oil on board
162 × 162 cm



廊下 - 2
Corridor - 2
油彩 / パネルにジェッソ
Oil on board
194 × 162 cm



見えぬ先に / In the point beyond seeing
油彩 / パネルにジェッソ / Oil on board
112 × 324 cm

修了論文：「死の舞踏」に見られるヨーロッパ中世末期死生観と表現の変遷と今日の死にまつわる表現の可能性

Possibilities of representation of the change of expression of death today and the view of life and death in the European late medieval "dance of death (Danse Macabre)".